

# オンライン外部教材を用いた英語科目の 運用改善についての実践報告

坂本 美枝<sup>1</sup>

## 1. はじめに

サイバー大学英語科は 2013 年度のカリキュラム改訂により、すべての英語科目を、オンライン外部教材を取り入れた演習科目として刷新した。英語科目は、改訂以前の旧カリキュラムにおいては、本学講義科目の基本フォーマットである VOD (Video on Demand) 形式で設計／開発され、講義科目として運用されていたが、より英語コミュニケーション能力の育成に資する形式とし、年齢も英語学習歴もさまざまな本学学生たちのニーズにも応えるべく、このような改訂を行った。このカリキュラム改訂の詳細、そして 2014 年度春学期までの英語科目の運用と改善については、すでに報告を行っている<sup>1)</sup>。

本稿では、その後の授業改善実践として、2014 年度秋学期から 2016 年度秋学期までの取り組みを、「スケジュール」、「学習方法の周知徹底」、「フィードバック」という観点からまとめて報告する。

## 2. スケジュール

### 2.1. 2014 年度春学期までの運用：外国語科目の枠内での模索

カリキュラム変更以来、英語科は「推奨期間」の導入や必修 LP【1 期】から【4 期】の設定など、英語科目を受講するうえで最適のスケジュールを検討してきた。2014 年度春学期には、次のような受講スケジュールが採用された。

全学的に定められた日時に開講すると、まずは学習方法を確認し学習計画を策定する「ガイダンス／教材アクセス／学習プラン」の推奨受講期間が始まる（1 週間）。それから原則 3 週間ずつ、オンライン外部教材内の学習ユニット「LP＝学習プログラム」に取り組む必修 LP【1 期】から【4 期】の推奨学習期間が設定されている。その後は 3 週間の期末試験推奨受験期間が続く。期末試験の日程は他の外国語科目（中国語科目）と同じであり、期末試験が未受験だった受講者への救済措置である追試期間も中国語科目と同様である。ただし、期末試験の最終期限を除き（これは科目の正規授業期間終了を指す）、すべての推奨期間に制限やペナルティはない。推奨期間の前に受講や受験を行うことも可能であるし、

---

<sup>1</sup> サイバー大学 IT 総合学部・教授

推奨期限に遅れてしまっても、期末試験を除いてペナルティは発生しない。

つまり、2014年度春学期の段階では、英語科目は、あくまでも外国語科目という枠の中で独自の運用を試みていたといえる。15回構成というフォーマットは踏襲していないものの、開講／閉講の日程は中国語科目とまったく同じである。とくに英語に苦手意識を持っている受講者の視点からすれば、問題をひとつひとつ解いていかなければならない演習科目の英語は、ほとんどペナルティのない緩やかな推奨期間という設定条件もあり、「受講を後回しにした結果単位修得を諦めてしまいがちな科目」の筆頭になってしまった側面もあったのである。

## 2.2. 2014年度秋学期からの運用：独自の運用へ

そこで、2014年度秋学期には、より独自性を打ち出したスケジューリングとした。開講日は他科目と同じであるが、それから2週間後に「ガイダンス／教材アクセス／学習方法確認テスト」の推奨受講期間が始まる（1週間<sup>2)</sup>。それまでの期間は、受講者は何の学習活動も推奨されないが、もちろん前倒してガイダンス視聴やLP学習を行うことができる。続く【1期】から【4期】までの必修LP推奨学習期間、さらに期末試験推奨受験期間はそれぞれ2週間であり、中国語科目よりも3週間早く正規授業期間が終了する。その後、評点は合格点に達しているものの、その他の単位修得要件を満たしていない者を対象とする追試験期間を約1ヵ月、評点合格ライン未達の者への救済措置である再試験を追試験期間に加えて2週間ほど行い、閉講となる。

上記変則スケジュールによる運用には、第一に、英語科目の「違い」を強調し、英語科目の単位を修得するために「いつ、何をすればいいのか」を受講者に意識させるねらいがある。受講者が、他科目とはまったく異なる、英語科目専用の計画を立てて学習を進めることを期待している。また、副次的ではあるが、全学的に開講直後に殺到する問い合わせに対応する負荷を分散させる効果も見込んでいる。

この「英語科目スケジュール」を採用した2014年度秋学期、英語科目全体での単位修得率が開校後初めて80%を超えた<sup>3)</sup>。後述するように、このほかにもさまざまな改善策を実施しており、それらがうまくかみ合った結果ではあるが、この独自スケジュールには一定の効果があることもまた明らかであると判断し、以降採用を続けている。

## 3. 学習方法の周知徹底

### 3.1. 2014年度春学期まで：学習計画の策定を優先

カリキュラム改訂によって、受講時の学習活動が実質的に外部教材システム内部のLPに解答することを意味するようになり、また学習のペースに大きく影響する「出席認定期間」（旧カリキュラムでは、15回のそれぞれに締切＝出席認定期間が設けられており、それに遅れると、原則として課題点に減点のペナルティが課せられた）がなくなり、ペナル

ティのない「推奨期間」へと変更したことで、受講者は自らの学習活動をより自律的に管理する必要に迫られたといえる。そこで2013年度春学期から2014年度春学期まで、学習の流れについてはガイダンスで詳しく説明するとともに、Cloud Campusの科目ページで、ガイダンスと同一のトピックに小テストシステムを利用した「学習プラン」を設置し、受講者が学期の初めに「自分ほどのLPをいつ学習するか」計画を立てることのできる機会を提供した。

しかし、実際には、計画どおりにはいかなかったり、よく考えずに計画だけ立ててしまっていることで学習が滞ったり、という例が散見された。また、問い合わせ件数においても、とりわけ多いのは「どのように学習を進めればいいのかわからない」という学習方法に関わるものだったため、ガイダンスコンテンツを視聴した直後の活動として、学習計画の策定はそもそもふさわしいのかという疑念が持ち上がった。

### 3.2. 2014年度秋学期から：学習動線の確認へ

上記のような課題を解決するため、2014年度秋学期には、何を最初に終わらせ、次はどうすればいいのか、その次は何をするか、など、いわゆる学習の「動線」を明確にする施策を講じた。受講者がガイダンスコンテンツを視聴した後で教材システムへのアクセスを試みることができるよう、同一トピック内に必修LP1リンクを設置しておくことは前学期より実施していたが、新たにリンク名を工夫し、学習のためではなくアクセスを試してみるためのリンクであることを明示し、アクセスが確認できたらすぐにログアウトし、速やかに元の「学習動線」に戻るよう誘導する役割を持つものとした。また、「学習プラン」を「学習方法確認テスト」と改め、文字どおり、ガイダンスで解説している学習方法がわかっているか、理解度を試すテストとした。なお、この学習方法確認テストは、Cloud Campus小テストシステムの「アダプティブモード」を使用しており、受験者は設問ごとに自分の解答の正誤を確認しないと受験が終了しない形式を取っている。そして、このテストで満点を取らなければ、受講者はその後の活動には進めない設定としている。このような仕掛けにより、学習方法の理解徹底を図っている。学習方法確認テストについては、学期中の受講者たちの動きを観察し、設問の入れ替え、設問中の画像の貼り替え、レビュー（正答や誤答に付される解説）の改訂など、毎学期少しずつ改修を行っている。さらに、必修LP【4期】トピックには、やはり小テストシステムを利用したアンケートである「学習時間確認テスト」を設置し、受講者に単位修得のために必要な学習時間が記録できているかを確認させている。この時間確認テストもまた、「十分な学習を経てから期末試験を受験するように」というメッセージを与え、学習動線を意識させる試みである。簡単なアンケートであるが、満点を取らないと期末試験を受験することはできない設定となっている。

ガイダンスコンテンツそのものの改修は2016年度春学期の開講準備期間に実施し、この学期に新たなコンテンツをリリースした。現在も使用している改訂版では、従来版では丁寧になされていた外部教材の特徴や英語科目で習得を目指すスキルなどの説明をできる

だけ簡潔にし、どのように学習を進めていけばいいのか、学習動線に関する説明を大幅に増やした。また、それまでの問い合わせ対応等から、受講者が犯しがちな間違いをカテゴリ分けし、「よくある間違いパターン」として原因の解説とその詳細な修正方法を新たに加えた。学習進捗の確認方法や評価に関してなど、受講に際しての重要事項の解説方針はそのまま踏襲した。

ガイダンスコンテンツの構成は4章のままとしたが、学習動線を主に解説している第2章の直後に教材アクセス用の必修LP1リンクを設置し、このリンクをクリックしないとその後の活動へ移れないよう設定するなど、学習方法を忘れないうちに即教材アクセスを試してみるよう誘導する仕組みを作った。よって、現行の「ガイダンス／教材アクセス／学習方法確認テスト」トピック全体としての学習の流れは以下のようであり、それぞれの活動へのリンクがそのままその流れを指し示している。1) ガイダンス1、2章視聴により、主に英語科目での学習動線を理解する。2) 教材アクセスを試行し、アクセスに成功したらCloud Campusに戻る。3) ガイダンス3、4章を視聴し、学習進捗の確認方法や評価方法など、受講における重要事項を理解する。4) 学習方法確認テストを受験し、主に学習動線に関する理解度を確認する。

## 4. フィードバック

### 4.1. 2014年度春学期まで：個別メール／メッセージによる奨励と注意喚起

英語科カリキュラム改訂に伴って英語科目の運営方法が一新されたことにより、教員／TAが提供するフィードバックのあり方もまた大きく変わった。すでに述べたように、受講者は【1期】から【4期】に分けて設置されている必修LPを、それぞれの推奨学習期間内に学習するよう誘導される。その期間内に学習を終えられなかった場合、減点等のペナルティは課されないが、教員／TAより奨励のメールやCloud Campus内でのメッセージが送られる。また、学習進捗データがCloud Campus内の「外部教材評価管理」画面に反映されるタイミングで、学習方法に誤りが見られ、是正が必要と判断された受講者については、主に教員から正しい学習方法を解説する注意喚起メール／メッセージが届けられる。

このように、2014年度春学期までに行われていた教員／TAからのフィードバックは、期間内に学習を終えられなかった場合の奨励や、学習方法に誤りがある場合の注意喚起と是正など、「できなかった」ことに対するもの、つまり否定的フィードバックに偏ってしまったといえる。もちろん、受講者は各LPの学習にあたって、ひとつひとつの設問に正解して得点を重ねているので、「できたこと」に対する称賛＝肯定的フィードバックも得ているわけだが、それは教材システム内で自動的に与えられるものである。支援者＝教員／TAから届くフィードバックが否定的なもの(是正や改善への誘導)のみに限定されることは、支援のあり方として望ましいとはいえない。自動的に与えられるフィードバックと個別に届くフィードバックを比較した場合、より支援者の存在を感じられるのが後者であることは容易に推測できるため、自動メッセージにのみ肯定的フィードバックを任せることに

よって、「この課題を成し遂げる能力がある」という承認を受講者にうまく伝えられない可能性が否定できないためである。やはり、「推奨された期間内にしっかり学習できました」という言葉は、教員／TA から伝えられるべきだろう。それでこそ、学習意欲の調整／管理と密接に関わる「自己効力感（目標を達成するための行動を自分で調整／遂行できるという信念）」をもたらす「言語的説得（能力があると認められること）」の役目を十全に果たすと思われる<sup>4)</sup>。

#### 4.2. 2014 年度秋学期から：称賛メール／メッセージ送信を追加

そこで、2014 年秋学期からは、それぞれ推奨学習期間が終了するタイミングで、各期に設置してある必修 LP をすべて達成できた受講者に対して、教員から、達成度や成果に関する肯定的フィードバック、いわゆる「ほメール／ほメッセージ」を、メールあるいは Cloud Campus 内メッセージシステムを使用して発信することとした。推奨学習期間についてはすでに触れているが、各期原則 2 週間となっている。「達成」とは、「必修 LP 得点が算出される」ことを指している。それぞれの LP は学習の結果により完了率と正解率が常に明示されるが、必修 LP は完了率 90%を超えることで、その LP に含まれるほとんどの項目を学習したとみなし、正解率を基に採点を行っている。正解率はともかく、推奨のペースで当該 LP 全体を学習したのであれば、「達成」と認めているのである。また、当該の期目標を達成したというタイミングを重視し、ひとつ先など、そのほかの期目標を達成している受講者は称賛対象から外している。ほメール／ほメッセージの内容としては、期ごとの学習内容を挙げ、それを推奨ペースで学習できたという称賛と、次の期への期待など激励から成っている。

また、2014 年度秋学期からの注意喚起／奨励作業にも変化があった。2013 年度の導入から現在に至るまで、教材にアクセスした受講者のうち 80%は単位修得できているという数値を基に、教材アクセス率の一層の向上を図ることとした。学期中、定期的に「ガイドランスコンテンツを視聴しているが、教材アクセスをしていない／成功していない」という条件にあてはまる受講者を抽出し、きめ細かくアクセスを促すメール／メッセージを送っている。こちらの作業は TA が担当している。

#### 4. おわりに

2014 年度秋学期から 2016 年度秋学期までに実施した英語科目の改善点について報告したが、もちろん課題も未だ多く残っている。

スケジュールについては、最初に学習準備期間があり、実際の学習期間については【1 期】から【4 期】の 4 回の開門を経て、期末試験受験に至るという、現状もっともバランスの取れたものとなっているように思われるが、必修 LP の数や難易度など学習内容を見

直すタイミングで、こちらも再度検討する必要があるだろう。

学習動線を整理し周知徹底して、受講者それぞれの意識にしっかり定着させる仕組みについては、より細やかなモニターと微調整が毎学期必要である。それは、受講者が使用する PC の OS やブラウザのバージョン更新に伴い、また外部教材の改修状況によっても、正しい学習方法の説明の仕方は突然変化する可能性があるためである。さらに、受講者が変わればつまずきの種も変わるかもしれない。綿密に受講者の学習状況をモニターし、よりわかりやすく説明するために、英語科としてもさまざまな方法／ツールを検討する必要があるだろう。

フィードバックについても、乗り越えるべき課題は大きい。現在実施中の称賛メール／メッセージは、時間や人的リソースの関係で非常に限定的な施策となっている。誰がどこまで学習を進めているか、条件ごとに簡潔に対象者を抽出できる方法があれば、推奨期間の終了を待たずに、適切な称賛を行うことができるだろう。

2014 年度秋学期で方針転換したが、受講者に自らの学習計画を策定させる仕組みの導入も、将来的に再度検討すべきと考える。オンライン大学で学ぶとは、自律的な学習者であるべきことを意味する。そのためにも、自らの学びを自らで管理できる力を育成する仕組みを英語科目にも取り入れる必要があると強く感じている。

#### 謝辞

サイバー大学英語科目の運用にあたっては、以下に挙げる方々より大きなご尽力をいただいている。サイバー大学英語科 TA／堀口恵氏、サイバーユニバーシティ株式会社学務部／河内一了氏、田中頼人氏、サイバーユニバーシティ株式会社システム部／杉村雅之氏、稲垣亨氏、中柴伸至氏、西村千春氏。末尾ながら、心より御礼申し上げます。

#### 注および参考文献

- 1) 坂本美枝、半田純子、杉村雅之、西村千春、東海林康彦「第4章 オンライン外部教材を用いた英語科目設計」『eラーニング研究』第3号、2014、pp. 29-38.
- 2) 2014 年度春学期の「学習プラン」から 2014 年度秋学期の「学習方法確認テスト」への変更に  
ついては第3節において述べる。
- 3) 履修者総数から完全未視聴者数を除き算出した数値である。2016 年度春学期に至るまで、80%  
を下回っていない。
- 4) Bandura, Albert. *Self-efficacy: The Exercise of Control*. W. H. Freeman and Company. 1997.  
p.3.

本稿は、2016 年 3 月 17 日に電子情報通信学会 2016 年総合大会にて著者が行った発表「オンライン英語授業における肯定的フィードバックの実践」の内容を基に、大幅に加筆／修正したものである。